WASON
...
1104
...
May 1891
no. 267

女學雜誌

第二百六十七號
明治二十四年五月三十日發兌

ウエレズレー大學實驗錄

在米國成瀬仁藏君の細密なる報告による。

畠山勇子（社説）

新聞紙報する所ろの外に事實を集め、情を穿ち性を推し、紙面躍然として眞人物を活かさんとを期して、之を批評す。而して論次號に渉り、之に因りて倫理上自殺の可否に論及せんとす。

女子詩歌（蓮峯）

文章春の野邊行く如く、雅趣秋の紅葉の如し、秀然時流の文躰を抜き、一種風流を極むるの味ひあり。而して、論理緻密、例證豊富、女子必らず歌を詠まざる可らざるの妙旨を巧みに敎ゆ。

小公子　エロル夫人が愁絶の躰

いよ〳〵佳境に入り、エロル夫人が愁絶の躰を妙寫す。

下六番町六番地
女學雜誌社

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 267. MAY, 30TH. 1891.

第二百六十七號目次

EDITORIAL :—Patriotism and Suicide.

CHILDREN'S COLUMN :—"Little Lord Fauntleroy." (A Translation.)

MISCELLANEOUS :—Women and Poetry. What I saw at the "Welsely College" (J.Naruse.) My Mother's Gift. Mt. Kunō. True Repentence and True Life.

NOVEL :—"Courtship of Miles Standish." (A Translation.) "Shikai no Arashi." (A Story of Persecution in Japan in the 16 Cen.)

CRITICAL NOTES :—"Senpō nikki." "Outlines of Natural Philosophy." "Shikai." "Kataito."

NOTES AND NEWS.

QUESTIONS AND ANSWERS.

CONCERNING WOMEN.

社說　畠山勇子(上)

兒藍　小公子(若松しづ子)。

雜錄　婦人は詩歌を學ばざるべからず(蓮峰外史)●ウエスレー女子大學觀察略記(成瀨仁藏)●母の賜●久能山(愛山生)。

隨感　眞悔悟さ眞生命(方寸子)。

小說　マイルス、スタンデツシュの戀(愛山逸民)●紫海の嵐(みさを)。

批評　戰砲日記(撫象子)●新編小物理學(馨香女史)●史海(撫象子)●かた絲(雲峰生)。

時事　近頃の新聞雜誌●今年の帝國議會●順流及逆流●機一轉●大文字●活宗教●國礎●社會問題●一謝。

女報　露國皇太子御遭難に付ての女報其他種々

日本帝國卒業女學生人名人數一覽

週報

物價

廣告

理學士、木村駿吉君著

女學校用　**小物理學**

並製四十五錢
上製六十錢

大賣捌　女學雜誌社

夏物賣出し

一例年之通來る一日より三日間夏物賣出し仕候間多少に不拘御用向被仰付度奉願上候

(永)

吳服
古着

牛込區市ヶ谷田町
あまさけや
福永儀八

六月
一日
二日
三日
麁景呈上

女學雜誌賣捌店

本誌の賣捌店の中ち、都合ありて發送を中止せる向も不尠、付ては從來其店より購讀ありたる讀者諸君に對し御迷惑相掛るとも可有之甚だ遺憾に付、右樣の諸君は直ちに本社へ注文被成下度候

尚ほ女學雜誌は創業以來一回も發行期日を後れたることなく現今は毎土曜日早朝に全國へ向け發送いたし居候に付、若し自然延着等の事有之候はゞ一々御申越被下度候。又右樣の次第に付賣捌所より諸君へ配達仕候を延引いたし候はば本社より右賣捌所へ向け發送中止したることゝ推量被成度候

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌 第二百六十七號 明治二十四年五月三十日發兌

社説

畠山勇子 (上)

津田三藏が事ありてより、天下の人心鼎の沸くに異ならず。乍ち飛報あり、一賤婦京都府廳の門前に自殺せりと。驚愕の念未だ治まらずして、悲哀の情更らに切なり。

新聞紙が傳ふる所ろ略ぼ實を得たり。畠山勇子が、履歴、性格、及び此度の思ひ立ちなど、今や概むね世の人に知らる。吾人の再たび叙するを要せず。

母の兄榎本六兵衛氏は、聞えある義商なり。維新革命の際み、江戸の人心浮草の流るゝが如く、未だ何れにも漂着せず、素町人にして大義名分を辨まへたるものは殆ど稀なりける。六兵衛夙に勤王の志しあり、西郷大村等が委頼により、快然一諾して金二万兩を軍用に献ず。其母内堅にして外極めて柔、五十年間姑舅に仕へて未だ嘗て一度だも言葉を反したるとあらずと。勇子此母に養はれて、従順の徳を得たり、此叔父に化せられて、夙に勤王の志しありき。平素云く、母の教育宜しきを得ざれば、子決して人とならずと。十八日、榎本氏を訪ひ暗に訣別するときの談話中に云へらく、津田三藏の如き不心得者を出すは、其母の悪しければなりと。彼女が、母たるものゝ徳を重んずると切なりしを知る。而して其生母に負へる所亦多かりしとを知るなり。

十八日の夜、叔父に語りて曰く、日本皇帝陛下、千古以來未だ一回も他邦に向つて謝辭を述べ玉ひしとあるまじ、然るに此度び一人の狂ひたる臣民が爲めに、態々宮を出で立たせ玉ひ、他邦の皇太子に向かつて御頭を下げさせ玉ふは、何如に口惜しきとぞ、陛下我邦四千万の民に代つて此忍び難きとを爲させ玉ふ、臣民たるもの何如にかして其御悩みの万一を補なひ奉まつらざる可らずと。意氣頗ぶる慨す。叔父殊更に叱し、之を和らげける。西京知線寺にて鉛筆もて認ためたる絶筆の遺書に云く、

……小女此度御迷惑を掛るは……日本四千万の姉妹兄弟の爲に身を犠牲にして御天皇様の爲め御慰みの爲め一身を捧げたるとに候……

男子素より英學を知らず、夫婦間に係はりたる高潔なる理想を得たりとも思ほへず。左れど一夫一婦と云ふとを、甚だ重んじ、男子の放埒にして操を守らざると、女子の賤劣に持なさるゝとを特の外痛歎したり。之が爲めに、古郷に於て良人の不身持を屢ば切諫し、遂に其改たまりがたきを見て離縁を請ひぬ。府下に來りてより、廢娼論をきゝ、いよ〳〵同胞姉妹の卑しきわたりに墜落するを深く歎き居たり。前に掲げたる遺書の末に曰く、

……日本の婦人は親に孝行をするとて女郎藝者などするものあり實に小女は後年日本婦人の事を思ふて悲しく存じ候いとこ供には何卒學問をさせて玉はりたく云々。

出京してより、一度は万里小路家に仕へ、亦た濱の原氏に仕へ、去年七月以后、日本橋室町の肴問屋(白武)に奉公したり。其主人の曰く、左して異なりたる所を見ざりしが、尋常婦女子の樂しみとする所を好ず、芝居などの事は口にだもせしとあらず、男女間の事を戯れにも言はず、碁勝棊を爲すものあれば傍らに來り熱心に眺め居たり、雄々しかりしが左りとて嚴めしきにあらず、綿密にして手拭一すじだに粗鹵にせず、下女どもに語りて學資あらば法律學を爲したしなど云ひぬ、大津の事ありてより、朝起きて火を焼き付けぬうちに早く新聞を讀み居たり、十八日家を出でゝ叔父の許に行くと云とき、絶て異狀あるを見ざりき、たゞ終日其部屋に入りて何やらん連りに道具を片付け居たるのみと。

彼女田舍に在るとき、未だ進歩したる婦道を多く聞かず、左れど其夫の操なきによりて離縁を請へり。再來深く女子の卑しまるゝとを歎き、特に女子の醜業に就くとを慨せり。而して、其望む所は法律學を修めんとするにありき、惟に離縁の際、今の法律の頗ぶる女子に無慘なるとを經驗せしともあるべし、亦今の女子一般の概むね世に虐遇せらるゝとを歎きたるともあるべし。かくて法律を學ばんと志ざしぬ。一つには時情此の志しを起さしめ、二つには彼女の性法律の學の如きものを好みしなるべし。寫眞によりて其風采を見るに、面方にして前額廣く、毅然として嚴酷の躰あり。蓋し、細かにして嚴しく、義にして方正を重しとせしものか。其所藏せる姿見の上に、自から題したる文あり、

日々に清めて鏡にうつし見よ貞操邪正其容貌にあり。

新聞紙の掲げたる彼女の小遣帳を見るに、路次の入費一錢と云へども差はず、當日の遣い拂ひを明細に記し、之を合計差引して而して后ち自刄したるが如き、もしくは、其所有品を一々書殘し、特に、些少のキレ屑を集め綴ちて反物としたるもの二反を遺したる如き、推して以て平素の嚴刻を知べし。吾人彼の肴屋の主人に問へらく、勇女は吝嗇なりし乎と、主人曰く否な。然らば彼女は吝かなりしにはあらず。彼女は、車夫を雇ひ、京都市中を廻る、時に夏日天に中し暑氣甚し、則ち菅笠一箇を買求め、之を車夫に惠與す、薄暮之に暇まを遣はすとき、亦た所持せる洋傘を與へ、小錢袋を與へ、身には銀劵正五圓を懷中して死しぬ。彼女は決して冷淡にはあらざりしなり。其所藏せる箱の横面に一首の歌を記す、

心には富士の白雪滿るほど戀はつもれど解るはかなさ

京都に降り、既に今日一日の命と覺悟しぬ。人力車上、みち〳〵人を眺むれば、樂し氣に笑へるものもありけん、商ないに忙はし氣のものもありけん、彼の忌はしき藝子舞姫は綺羅を飾り是見よがしと裾を飜がへすもありけん、勇子熟々と見て、其感果して如何にありける。車夫に命ずらく、同志社女學校に行けと。彼女は死に瀕して尚ほ其修學の自由ならざりしとを憾みける。門前より女學校の校舍を打見やり、亦車を反させて、知縁寺に到る。

彼女未だ之と云ふ宗教を信ぜず、其姿見の邊に書して云く、天照皇太神宮と。左れど、必らずしも神道を信ぜしにもあらず。知縁寺に詣づるもの亦之に同じ。然れども、人浮世の虚煩を脱し、榮華功名の羈を斷ずるに當つては、必らずや常よ人間天眞の本面目に反る。所謂道心復活し、宗教の念眼を覺すの時なり。彼女院の欄に憑り、そゞろに都の風景を見下ろし、遙かに西の山を望む。木の葉青く、浮雲白く、町の塵高し、而して寺内寂々として人なし。感慨胸に滿つれど、風景の美は陶然として我を醉れしめ、生死の境ひを解脱して、本我空々に逍遥遊せり。瞑目して念佛し、丹田を靜めて、天地を忘る。時に老僧來り、參詣の人俄かに病めるにやあらんと思ひ、心づかいて問ふ。彼女穩かに頭を擧げ、沈目、謹みて會釋し、否らずと答ふ。且つ一首の即吟を呈す、

今日參ちあみも深き知縁寺の景色のよさに憂を忘るゝ

調句整雅、平常の作に似ず、時迫りて心亂れず、風景を愛して死を忘れ、昂然として風流の餘裕あり、素より尋常の膽力にはあらざる也。

畠山勇子、內慷慨にして外極めて謹肅、生來勤王の念あつくして、亦た多少時勢を知る。常に同胞姉妹の地位の爲に歎きて、火を燒き、米を炊ぐの庖厨に立志奮發する所淺からず。方正にして義を愛すと云へど、思慮愼密にして物を輕々しくせず。十二日大津の變あり、電音八方に轟ろき、東京府下即日に之を知りぬ。之を聞きてより、肴屋店頭の一婢女、心頗ぶる安からず。十三日陛下發輦あらせ玉ふ、彼女は身自由ならず、之を奉送せざるを何よりも苦しきとに感ぜしなるべし。熟ら國難を思ひ煩らい、一身の果敢なきとを歎じ、朝たに起きて鏡に對し、襟を正ふして窺がふ、妾が貌ち何如にと、十四日鏡に帋を替へて、即はち前文「貞操邪正其容貌にあり」と書す。平素沈默容易く口を開かず、爾來いよ〱沈默、しきりに案慮す、主人必らずしも彼女が思ひを知らず、傍輩もとより共に語るに足らず、薪を取らんとて暫らく打沈み、水を汲んとして暫らく考へ、心なく、促がされて茫然其つとめを盡せしともあるべし。十七日、新聞帋上に急電現はる、露國皇太子いよ〱歸國せらると、勇子此に至りて既に决する所ろあり。蓋し云く陛下を慰さめ奉つらん、露國に謝せん、女流の改革者たらんと。十八日暇まを請ふて叔父を訪ふ。

夜叔父に談じ、少しく試むる所ろあり、叔父叱して聞かず。あくる朝、早く立出て、途中所有品を典し、金十圓を得て輕發早下す。みちすがら、滊車の歩み尚ほ遲きとを感じ、驛次の休みの既に徒らなるとを思ひつる情もありけん。

知緣寺の僧に歌を呈し、車夫の迎ひ來るに乘りて辭し去る。府廳に到り、書を奉まつるに受けられず、時に日すでに沒し薄暮時ならぬ冷氣を送り來る。遠山の烏林に歸り、知緣寺の鐘我を知るとやひゞく。數町車夫と共に廳の門前を去る。共に去るは車夫をして行かしめんが爲めなり。懇ろに之を勞はり、傘と錢とを與へて立かへる。

廳の門すでに鎖す。濠の水滯りて暗し。往來の人絕ぬ。四面極めて靜かなり。則はち、携ふる所ろの白布を出し、門前に敷き、下帶を解いて兩足を縛し、嚴然として布の上に坐わり、前に書三通を列べ、一拜して鋭尖刀を喉深く刺すと二度。絕せず。更に心を刺す。

思はず叫ぶ所ろやありけん、門番出で。見、驚走す。巡査來る。問ふて曰く、汝ち狂せる乎と。勇子左右に首べを振る。更に問ふ、苦しき乎と。漸やく答ふらく、苦し、左れども。天を指ざしつゝ、後ろに倒る。かくして遂に死せり。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

兒藍

小公子

第五回（中）

若松しづ子

さてセドリツクが同行の人々とリヴァプールへ着しましたのは、彼のチツクに別れてから十一日めでして、その翌夜、三人同車でステーションから今後セドリツクの母の住居にならふといふコート、ロッヂと申す家の門に着きました。最早暗がりで家の模様は分りませんかつたが門へ這入る時セドリツクの眼に止りましたのは、双方から覆ひかゝつて、アーチの樣になつた大きな木の下に、馬車道のあるとで、こゝへズツト乘り込むと戶が開いてゐて燈火がチカ〳〵戶外へさしてゐるのが直ぐ見えました。さて、メレはセドリツクの母の侍女に成つて同行致しましたが、此時モウ先に此家へ着して居りまして、セドリツクが馬車から飛び降りました時、廣いチカ〳〵した廊下に、他の婢僕と共にお出迎ひして居りました。フオントルロイ殿は、いきなり彼の老婢に飛びついて、嬉しそうな調子で、言葉をかけました。

オヤ、メレや、お前モウ來て居たかへ?、かあさん、メレが來てますよ。

といひながら、メレの餘り滑かならぬ赤ら顔に自分の顔をすりつけました。

メレや、わたしはお前がこゝに居て呉て嬉しいよ、おまへの顔を見た計りて、心が落着く樣だよ、處慣れないで變なのが、おまへが居るのでよつぽど心やりになるよ。

と低い聲で云つたのは、エロル夫人でしたが、メレハ其言葉と共にさしのべられた小さな優しい手をシツカリと握りしめまして、心の中に、母の身になつて、遠く我が國を離れたヨりに又一人子を見ず知らずの人手に渡すのはどの位つらかろうと切りに氣毒に思ひました。家附の英人の僕婢たちは、皆眼を丸くして、シゲ〳〵と親子を見て居りました、兩人については、早くもとり〴〵の流評を聞て居りまして、老侯の憤怒、エロル夫人を別居させる理由、若侯の將來受繼ぐ可き莫大の產業、癇僻と酒風症とで殆ど野蠻に近い老侯の氣質などの事を、皆な知りぬいて居りました故、

やつこどの、可愛そうに中〳〵樂は出來まいよ。

と、互にひそ〳〵話して居りました。併し僕婢どもは今度お入になつた若侯のとは一切知らず、固より未來のドリンコート侯たる可き人の性質などは少しも分らずに居たのでした。

セドリックは、普段人の手を持ちつけぬ質で、無雜作に外套を脱でしまいました。それから先づあたりを見廻し升と、廣い廊下の飾りつけには鹿の角やさま〴〵珍らしきものが有ました、平生の家にこふいふ飾りつけを見たとは是が始めてゆえ、セドリックの眼には隨分不思議に見えました、

かあさん、これは大層きれいな家ですチイ？かあさんがこれからこゝに入つしやるんだから、好いとチイ、そうして隨分大きい家じや有ませんか？。

といひました。ある程、ニユーヨークの彼の疲弊した町に有つた家と比らべては遙か奇麗で、爽快な住居でした。メレの案内で、二階へ登れば、眼の覺める樣な白紗の窓掛がさがつた寐間に、火が焼て有り、大きな雪の樣な白いペルシヤ種の大猫が、眞白お毛革の敷物の上で、氣樂そうに寐て居り升した、メレは此を指ざして、

アノ奥樣ア、此猫は御殿の奥の取締がよこしたんでございますよ、マア何んちう深切な人でんすか、そうして奥樣がおいんなはるつて、何んていとなくみんな仕度をしたんだそうでんすよ。わたしも一寸おめにかゝりましたが、アノなくなつた旦那さまを大層秘藏にしたそうで、大へんに惜しいとをしたつてかたりましたよ。それから猫でもゐたら、チツタアうちの樣な氣がするかしんねいつて、よこしなせいましたよ。それからカプテン、エロルはお少せいツから、知つてゐたんだちいましつけが、推出しの好い、可愛いゝ子だつけ、そうして大きくなつても、きれい人にも眼下の人たちにも優しくつて、ほんとうに立派な人だつけつちいますつけ。せいからわたしもこういひましたよ、こんだおいんなはる坊つちやまが、トントそんなでんすよ、わたしやあんな立派な子見たとが有ませんてチ。

さて此部屋で少しみなりをとり繕ひましてから、又下へ降りて、こんどは大きな立派な坐敷へ通りました。此坐敷の天井は殊さらに少し低く、周圍の道具などは一躰にドツシリして美くしく彫刻して有りまして、椅子などは坐はり込みのふかい、寄り掛りの高くつて、ガツシリしたのでした。花壇や違

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

棚は大そう風雅で、その上には見事で、極く珍らしい置物がならべて有りました。暖室爐の前には、大きな虎の皮が敷いて有つて、兩側に安樂椅子が据へて有りました。彼の嚴めしひ白猫ははや、フォントルロイ殿に懐つき始めまして、跡について下へ降りましたが、今も革の敷物の上へ寐ころんだ側へすり寄つて、これからお親しく願ひますとでもいひそうな風つきでした。セドリックは嬉しく、自分の頭を猫の頭の側へよせて、手でおもちやにしながら横になつてゐまして、ハ氏と母とが、ヒソヒソ咄してゐたことは耳に這入りませんかつた。エロル夫人は少し顔の色がわるくつて、何か心に安からぬ思がある樣子でした。

今夜は參なくとも宜うございませうね、切て、今晩丈は一處に居つても宜うございませう、あなたはどうお考へです。

と低い聲でいひますと、ハ氏が又同じ樣な調子で、

さ樣で御坐るて、今晩はまづお入りにならずとも宜しかろうと存じます。愚老が食事でも濟ましませば、先づ參上いたして、御來着の趣を老侯へ通じるでござろう。

エロル夫人はセドリックに眼を移しますと、彼の黄と黒の毛革の上にたわいのない中にしなやかな樣子して、寐そべつて居りまして、少しポツトしたきりやう好の幼顔の上と、毛革の上とにフサフサと亂脈に散廣がつてゐた髮の毛は暖室爐の火を輝り反へして居りました。彼の大猫はさも安樂そうに、ゴロゴロいひながら、寐むそうな顔してゐまして、セドリックの優しい可愛い手で撫でられるが嬉しい樣でした。エロル夫人は、この樣子を眺めて、我しらずホヽ笑みましたが、其ホホ笑が外へ現われるか現はれぬに、急にしほしほとした顔付に變じまして、

侯爵さまは、わたくしがあれを手離ます苦の半分も御承知有ますまい。

といつて少し改つて、ハ氏に向ひ、こふいひました、

あなた、どふぞ、あの金子のヿは私がお斷り申たと、侯爵樣へお傳へ下さひますまいか?。

金子!。其金子とおつしやるは、老侯が歲入にしてお定めあらうといふものゝヿでは御座りますまい。

と不審そうにいはれて、又何氣なく、

さようでございます、そのヿを申すので御座います、……

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

全躰此家を頂戴するのも子供の側に居るに上都合と申す丈で、餘儀なくおうけをいたしたので、其外は質素にさへいたしますれば、不自由はせぬほどの用意は御座いますから、金子のことは先お斷りいたし度うございます。侯爵さまが私をばさまでにお忌み遊ばす處ですから、若し金子を戴けば、どふやら、セドリツクを金に引返へる樣で心よく御座いません、今セドリツクをお引渡しするといふのは、たゞあれの利益とおもひ升れば、母の情で自分のことは忘れて居りますのを、こうなるとは、亡き父も望む所であろうと考へますからのことです。

それは甚だ不思議なことです、老侯にもあなたのお心を汲みかねて、御立腹になることであろうと思われます。

侯爵さまも少しお考へなされば、お分りだろうと思ひます、わたくしは其金子がなければ困難いたす譯でもない處を思ひますれば、私をお憎み遊ばして、御自身の孫にあたるセドリツクを現在母とお引別になる其方の御給與なさるもので贅澤をいたさう心にはどふもなれません。

ハ氏は暫時默考して居りましたが、ヤヽあつてから、

さようならば、お言葉通りに申上るといたしませう。

雜録

婦人は詩歌を學ざる可からす

蓮峯外史

櫻の雪は地に墮ちて聽ども音なく幽鳥の一聲遲日の寂寥を破りたりとの幽靜の境に入り清潔なる書齋に大和唐土西洋と品々いろ〳〵の詩歌を集めて翫弄ものとなし心をやれるなかだちとすかく閑寂に耽る身となりても胸中に塵埃の氣滿ち俗念の消る間もあかりせばしづ心なく散花の趣を詠じおぼつかなくも呼子鳥友なき宿の蕭騷を吟ずるを得んや松のはしら萱の軒つくれる宿に起臥して圃に邵平の瓜をつくりてはとなりかくなる世を忘れ諸葛が桑を培養して稼にみだるゝ世の中に厭が小田卷繰返し糸より細き生計を年々に營みても心を天地の外に遊し念を塵境の繁雜に離たらんにはそのものに應じて發する處の聲皆金石の音と爲て鬼神をも號泣しむべしそれ詩客歌人とあるの價値は厭世の念を起し人生の狀態を慕はむにはあらずかの瓦礫を變じて金石となし悲哀の境遇を轉じて快樂の鄕となす魔術的の手段を活用して吾人の心に益を計らんとするにあるなりうき世篤の玉簾拂らひかねたる悲愁慘澹の現

遇に際會ひても其心は暢然として亂れず自己を繞圍する森羅万象の變現百出し來るもその靈臺を悩すによしなく無常轉變憂喜手のうらをかへす世の中の出來ことには思をとゞむることもなし酸辛和樂と品はかわれど一括してこれを吟囊中に收拾して精金美玉の語にあてはめて歌んとすこれ詩客歌人の本分なり人或は人情世態を理解せんと欲して誤て花柳の夢にほだされつゝ終に遊蕩子となるあり浮世の苦樂を離れんため禪を學ばんと思ひ立黑染の形に身をやつし念珠を手にくるも貪嗔痴の村雲は眞如の月なる心を掩ひ名利のとこやみとなるもあらん詩人の境遇はこれと異なり人世行路の難易を踏分て悲哀の境にたどり快樂の地にさまよひ厭世の思を動かし憂國の情を發す身にふりかゝる憂思感慨さながら雲霧にひとしく晴れて後は心に一點のあとをとゞめず澄ぞ渡れる秋夜の月趙璧の全きが如し榮枯得失定めなきあだあるこの世に生存て額に老の浪をたゝみ肩に初霜のつもれるを辨へず腰は梓の弓を張るまで役々として心を悩し居所の羊の歩く如くせんより詩歌の權を實用して往事を春の夢となし行末はたゞしらずけふしも我がもの我が世と思ひなし憂も樂みも雲烟の眼界を遮るが如く見做して心を幽優の地に置くことそよけれたとひ身は紅塵の腥き衢にありてさま〴〵と世渡りのことに勞働するとも心は常に滿閑なる乾坤の中に逍遥自適するにしかず。

文學の盛に行るゝ明治の御代には男女の分なく詩歌に志す人多しといへども單に美術の一部分として之を學ぶにすぎずその辭は美しく其の思想は清しされど心腔裏より發するものにしあらねば一唱三歎すべきの趣もなし況して幽なる鬼神を哭しむるにおいてをや假定ば三尺の秋の霜をかざして千騎萬鎗の中に馳せ入り命を失はんと思ふも國を憂ひ君を愛するの丹心なく名利勝他の爲めとせば其の勇もさまで稱すべきものにあらず柳の條細く靑き蘭蹊のかほりを衣にうつし秋風の名殘を送る姿をやつしても其の心翠帳紅閨の裏を離れずば世をはかなむその狀僞りとのみ思れてあわれと覺ゆる人もあらじ槿花をみてはかなきためしと詠じつゝ花にさきだつしら露の墜ちては更に跡もなき自己が身の行末を悟らず山の端近き有明の月影を詠めて我が世更ゆくことを覺へず自らかりそめの況遇を爲りて暫時そこに思をよせ心にもあらぬ辭を發して人を驚かさざれは死せども休めすといふは豈誤謬の甚しきことな

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

らずやとれたゞ詩歌を死物とし翫弄物として吟咏するの類にして心の上に多少の影響をおよぼすことなしかゝる詩歌は吟咏せずもがなと思れけり杜少陵が麻の如く亂るゝ世に遭遇して愛着せる妻兒に離れたのもこのもと流浪して結びかけぬる竹枕涙つゆけき曉の夢幾山川をうち越へて故郷とうく歸りゆくその切なる情を吟じて、魂招不來歸故郷、また兒女のいたくかんぜなき狀をあわれみて、世亂憐渠小家貧仰毋慈、其の實況を吟じたるものなれば人をして無限の感を惹起さしめ自己はこれを吟じて心を慰るよすがともなりなん蘇國のゼームス一世かウインド城中に幽閉せられし時孤寂無聊の身にありながら、旅人のかごに飼てふ鶯はせまきねぐらに歌ひつゝおのが心に春やつげけん、と朗咏して幽囚のものうきをも忘れて八とせの星霜をとゝに消遣せしとかや昔平家都を落て後諸將太宰府へ在りし時薩摩守忠度修理太夫經盛皇后宮亮經正等か久方の月にむかひて思を演べ歌などしけるを見るにわすは露とも消る身のさながら心にかゝるくまもなく安すくかりける其狀は優にして當時のさきを想見せしめたり大石は濁江の魚を咏じ大高源吾が君の爲め骨を粉にし身を碎きたる困危の際に發せし句などをみれば其の心の在所を見るに足れり又加賀の千代が夫に別れて獨り寢る夜の衣をかたしきて淋さまゝに蚊帳のひろさ哉といひしは無限の趣を含みていと優にぞ聞へたりとれ他なしその實況に身を置きて感思を詞に寫せしものなればあり我はむなしき況遇にありて虛しき辭句を練ることを嫌ふとともに人として詩歌を作爲するにおこたることを卑むものなる殊に婦女子は詩歌の思想なくば何となく事のかけたるやうに覺ゆるなり誠に見よ婦人ほど況遇に制せられ其の情のかわり易きものはあらじ貧を見ては歎き富を見ては悅び憂喜の思に心を煩わし戀慕哀傷もみな腸を斷つなかだちとならざるはなし幸に詩歌の道にたづさわりたる女は心の優にして歡も悲も恨も共に忘れて世の中をなにゝたとへん朝ぼらけとぎ行舟の跡の白波の消るが如く名利にも苦樂にも澹然泊然として我枕をおく處我食卓を据る所を樂土となし幸福の園となして生涯を送なり世の姉妹吾と感を同ふする者あらば乞ふ和歌の艶麗唐詩の壯快秀逸西詩の精妙を仔細に看破せられよ自ら一家の調を爲りその思想を述には恰も麻姑を雇て癢處をかくが如くとゞかぬといふ處なかるべし何故にこの優美な

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

る道を外に見て徒らに歌骨牌の小技に心を用い力を盡して憂を慰め懷を遣り得たり顔にわした夕を送るや心のそう〳〵數畢屈なる女は柳姿桃頰ありといへども慕ふ可きものにあらずたとひ姿容はさまで美麗ならずともその心のさままさりて優美ならんには自ら人をして影慕の念を發せしむるに足るものなりひと抱の柳と目稱せし千代も其の雅趣は人々の賞讃しておかざる所になん梁川紅蘭が姿の花さまで馨ねどもその況遇に處して自ら守る處あり又その心ばせのゆかしきを以て後に世に名を傳へたり今や和漢洋の文學をくまなく學び得たる女子にしてこの世に處して何に一トつ見べきものなく榮花名利の暗中に夢を結び秀たる技能はありながらたゞ凡人庸婦とおなじ瀬に立ち水の泡の流れてきゆるが如くなり行もかなしき事ならずやよしや面貌は飾らずともその心に優美をみたし世の中の事物に思をとゞめずものゝ外に遊びけん詩客歌人の境遇を窺ひてこゝ住吉の松の齢を重ね代々を經て其の名の榮へんことはまた快きことならずや。

外國より鷄卵を輸入すると毎年三万圓内外なり。細君今一段養鷄に盡力せば、女子大學は卵の輸入金丈けにて立派に維持せらるゝなり。

一一

ウエレズレー女子大學觀察界記

成瀬仁藏

ウエレズレー女子大學は、米國に數多ある女子大學中、最大なる者の四の中の一なり。社友、成瀬君細かに之を觀察し其實况を左の如く報道せられたり。

余は當國ウエレズレー女子大學より招待を受るの榮に遭ひ、去る四月十三日より一週間校内に設けたる、頗る整理せる客室に、滯泊して、日々教員生徒同樣の特權を有し周密なる觀察を遂ぐるの便を得たり。今其槪畧を記さんに、

設立、 本校は今より十五年前ダユラント氏なる人の設立せしものにて、當國に於ける女子大學（男子大學と同等の學科を授る校）の嚆矢なり。ダユラント氏は其最愛の一子を失ひ、大に感ずる處あり、莫大の資を投じて、其校設立に着手し、一時に土地三百エーカー、（吾三十六万五千四百坪）を購求し、自ら監督して、校舍を建築し、凡ての附屬品、並器械を備へ、準備全く成りて、開校するや否、直に三百名の入學生あり、其より年月と共に成長し、今日に至れり、現今生徒總員七百名、九棟の大厦巍々として雲間に聳へ、理化學室、書籍館、美術學校、音樂校に至る迄、萬端完備せざるはなし。

位置、 余が彼地に至りし日、着せしは午后三時頃なりしが、滊車を下り、停車場より數丁計緩歩して、校に達し、其の庭内に入り、暫く足を止め、眼光を放て四面の光景を見渡すに、地は平坦ならずして、無數の丘陵を成し、周圍三英里の湖水ありて、其中央に位せり、此日天氣朗にして、鳥は樹間に囀り、草は綠を吹き、鏡の如き湖面萬象を映して其景色得も云はれず。時に數多の生徒各々日課を卒へ、或は互に手を携へて庭内を逍遙せるあり。或は草に横り、或は石に倚りて息へるあり。或は丘に登るあり、谷を降るあり、若くは湖水に舟を浮べ、又絶壁に臨んで遠景を眺望せる杯あるを見たり。此時余は思はず胸中に叫びて云へり。嗚呼是れ實に余が平素理想的の女學校位置たるなりと。

清潔、 七百名の青年女子の集へる塲處なれど、何れの校室に至り、何れの寄宿舍に入るも、隅より隅まで、淸潔に且つ美麗なるは、余の感嘆して止まざる處なり。中にも教員會議室の如きに至ては、裝飾燦爛、殆ど目を眩せしむる許なり。板間の如きも拭き掃除行屆き、光澤を發する程になり居るものから余は一の大失錯をなせり、即ち余は一日ストンホールと稱する堂に入るや、帽を掛んとして誤て足を失し顚覆したり。

教授法、は講義、自修、問答、等の法を用ゐ自發、自動、的の方針を取るものゝ如し。故に教師は簡短緊要なる講話をなし、其綱領と參考書及研究の方法等を委しく生徒に示すのみにて、生徒をして書籍館(十二分の書備て生徒の需用に應ず)或は器械室に至り各々研究實驗を遂げ、己の説を立てしめ、然して問答日に當り各自研究、實驗、の結果を演述せしむ。中にも理化動植物の如きは、生徒各々試驗すべき物品と器械を與へられ、其觀側、實驗する處を一々圖に畫き、説明を附して、提出せり。余は教授時間の様子を一々參觀せしが、生徒の答辯は實に明晰にして、又綿密周到なりき。

女子の智力、教員は教授十四名助教授五十餘各(悉く女子)なるが或は歐洲の大學を卒業し、學士、博士、の學位を有せるあり、或は當州の數個の大學を卒業せるものもありて、哲學、心理學、數理學、理化學、等の講義に至ても十分明晰に、深遠なる學説を述べ、且教授の仕方も丁寧、敏捷、を極むるを見。又一方には生徒問答も中々深遠高尚なる理論に渉れるを聞き、實に女子の進歩を驚嘆せり。余は斯る結果を實際に目撃して、女子の頭腦は男子のものよりも少く、其智力は男子の智力に及ばざるや否やの、疑問殆ど消失せるが如き感覺を起したり。

女生徒之風俗、男子同等の學識を有すること七百有餘の女生徒、及六十有餘の教員女學者の女風を目撃せば、如何なる偏見の人も、女子に學問を爲さしむれば、なまいきになり、男らしくなり、粗暴になる、との感想を消散すべし。余は一週間此校に寄となり、日々數多の女教員、女生徒の待遇を受け、また常に三百名或は百名或は二十、三十、の女生徒、教員と食を共にせしが、其丁寧親切なる、其謙愼柔和なる更に無學の謙遜女子と異なるを見ず、否却て無學なるものに優るを覺へたり。殊に其擧動の規律正しく、衣服頭髮の整理したる、實に女風の發育を見るに足る。尤も中には僅か一二の威張た風、高慢なる擧動を見受けたれども、併し斯る女は、假令無學なるも、矢張其通りの女にて、學問したる爲め斯くなりしにはあらずと、余は信ぜり。又余は寄宿舍の内情を探らんと欲し、女生徒、取締、抔に種々内幕を問質したるが、生徒間競進の念はあるも嫉妬心の如き情は絶て無きが如し。最上級なる四年生は自ら思想も高尚に希望も遠大にして少しく威光を有するが如き様なり。世間男子大學新卒業生を、學者馬鹿など、評することあれども、學問したる女子も之に類する迂濶者になる弊ありや、余は殆ど之を知らず。

能辨術、身幹四肢の動作、呼吸器の使用法、發音の鍛錬、等凡て能辨術に必要する術業を教授せるは、矢張り女教員にて、巳に五十の齡を經へたる活潑なる老婆なり。隨分熟錬したるものにて、感服したる點少にあらずと雖も、嘗て男子學校にて見たる男子教員の老錬家と比較すれば、稍劣りたる樣感じたり、素より四肢の使用法にまれ、發音の工合にまれ、女子の能辨術は自ら男子と異なる處ありて、其天然に從ふて尤も能く發育せしむるを勤むるを主とす可れば、一概には比較し難し、又この習錬の結果か、或は他の原因かは明に定むる能はずと雖も、余は該校の禁酒會に臨み、生徒數名の演説を聽聞したる時、其音聲七百名の耳朶に達するに十分の力ありて、思想も明亮に聞取らるゝを覺えたり。此禁酒會の會員は悉く女生徒女教員なるが、或は拍手、喝采し或は花にて飾したる褒典、を與ふる等のことなりて、中々熱心に滿ち、隨分盛なりき。又余は是迄時々婦人の説教演説を聽き、男らしき嫌あるを見掛りし事もありしが、當夜の女生徒の演説中には、かゝる見苦き風躰言語を毫も發見せざりき。

徳育、は全く基督教の信仰を以てす、毎朝講堂に於て聖書朗讀、禮拜、讃美等の式を施行し、生徒は殘らず出席して、最と嚴肅に式を守れり、又た日曜日每には、何れの宗派を問はず、地の遠近を論ぜず、有名なる牧師を、方々より招きて、説教を委頼せり、余の在留中は、彼の有名なるボストン市のヒリツプ、ブルークスの説教ありたり、又六十餘名の教員は、常に生徒の間に雜居し、食堂の各テーブルには、一二の教員あり、各種集會にも生徒間に教員の散在しあるを見たり如是生徒教員の間に親友の情保たれ、自ら家庭の風を養ひて、不識、不覺、教員の感化生徒に及び其品格を薰陶せり。

(未完)

かきにごしかきにごしなば眞淸水の末汲む人の何如にうからん　靜安房

今日參るちなみも深き知樂寺の景色のよさに憂を忘るゝ　畠山勇子

母の賜

古來幾多人傑中、己が一生の大成功を、多くはその母の教導に歸せざるは稀れなり、而かも又眞情もて母を尊崇せざるは無し。下の如きは其一例なり。彼の有名なるジョン、クヰンシー、アダムス氏の、おほ十二歳の頃、其母氏に手紙を送りて「おん身后來不純潔なる、放埒なる者と生長せんよりは寧ろおん身が死して墓に入らんことぞ願わし」と云へり。氏の晩年の事なり、或紳士、氏に向て「余れ君を君たらしめし所以を見出せり」と云へりしに、アダムス「そは何事ぞ」、紳士「余れ君が母上の手紙を拜讀したれば」と答ふ。此紳士其時の樣を人に語りて云ふ、「余れアダムスに向て、君が母上と云へりし時、恰かもこれ小兒が、其離れたる母てふ詞を聞きし時にもまさりて、かの尊むべき老人の眼は、見る／＼輝きたり。其時老人はツト立ち上りさま、然り、君よ、わがあらゆる善事は皆これ母の賜なりと云へり」と。

（愛山生）

外祖母某氏の歌に曰く

四方の海なみ靜かなる御代こそは、そのなかごろのなごりなるらめ

余徳川臣屬の子たるもの豈人情炎涼の態に感なからんや

久能山 （四月四日に遊ぶ）

愛山生

ますら武雄の　驗さわに　我日の本に　みち／＼て　國の光の
かゞやきし　慶長元和の　古しえを　今又此所に　しのぶ
かも。
麻の如くに　亂れにし　世は君の手に　收りて　劍を鋤に
うちかへて　馬を華山に　放ちたる　いさをは高し　たぐ
ひなし。
去年の今日は　鎌倉の　八重に茂れる　青艸に　露の涙を
そゝぎてし　今年は此所に　英雄の　骨を弔ふ　夢の世
や。
墓にへつらふ　詩人らや　骨やはらき　歌人が　むかしを
しのぶ　ゑせ文字　もしも御神に　靈わらば　さぞやおかし
と　をぼすらん。
靑野が原に　龍飛んで　虎うそぶきし　いさましさ　浪華
の城に　花散りし　その一時に　遇はざりし　今の吾こそ
怨みなれ。
人の心の　さま／＼に　是非のけじめは多けれど　三百年

のいしずへを すへし御業は 誰とても いと尊しと 仰ぐらん。
夕日にうつる 海の影 其わきかへる 有樣は 君がいましゝ 世の態を うつして此所に 心ある 人の袖をば うるほさん。
宮居を見れば 巍々として 昔しのさまに かはらねど 詣づる人は まれにして 庭の櫻の いたづらに 散り行く春ぞ かなしけれ。
一貴一賤 交情の かはるに早き 世なればや 豐國廟を見捨てたる 人の子孫は 今は將 君の廟をも かへりみじ。
山は靑葉の 影深く 木の間もれくる 鳥の聲 聞くにつけても 思ふかな 世は群小の 村雀 鶴の一聲 いとほしや。
霞と海に 隔てられ かすかに見ゆる 伊豆の山 是れ賴朝の 旗上げし 所と聞くも をのづから よき一對の 氣色かな。

隨感

眞悔悟と新生命

すか子

恥辱の念は、何人の前よりも、已れの眞心に對して、深かるべし。己れの眞心に深く感ずるは、これ天道に對して、切に感ずるの證也。己れ能く靜思默考して、渾然ワルかりしと、全心全躰に感動する迄は、輕ろ〳〵しく、人に詫ぶ可らず、また、己れ自らにも詫ぶべからず。只之れ眞に確かに、感じたる後、口と共に全心全躰もて、詫びすべし。後悔とは、ワルかりしと、後にて悔ゆるとの義なれど、其ワルかりしと、斷言する時は、既に全く、其過失罪惡を脱して、之を過去に葬りし時あらざる可らず。人誰れか罪過なからん。只悔て之を脱するを、立派の人といひ、悔て之を脱する能はざるを、意氣地なき無骨漢といひ、悔ゆることを知らざるを、破廉恥の俗輩とは謂ふ也。俗輩は論ずる迄もなし。意氣地なき者とて、悔ひざるにあらず、たゞ全心全躰に痛悔して、斷然之を解脱せざるが故に、間もなくして、復た其悔を繰返す。獨り立派の人物に至つては、只に知覺の上に、分別するのみならず、飽くま

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

で沈思瞑想して、全くワルかりしと、知情意全躰に電通せざれば止まず。かれ廉恥心の鈍きに非ず、悔を繰り返へすとの、如何に言甲斐なく、如何に不覺悟なる、否とよ呑き罪なるを信ずればなり。故ゑ其感の完く電通せざる間は、人にも、天道にも、己れ自らにも、詫ぶるとを爲さず、優々儼々として、己れを、己れ自らの良心に訴ふる也。斯くて良心の判决、明白に宣告するや、己が全心全躰は皆、これに承服して、天道に對し、良心に對し、また人に對して、堂々として詫びす。即ち手も、足も、口も、心も、一心一躰の一人となりて、謝罪を斷言す。此時既に背き余れ死して、新らしき余れ活くるなり。今や、余れ完く新らしき人なるか、何を以てか、過去の罪過を恥かしと悶へん。却てこれ立派に更生れるとを喜ぶべき也。如何んぞ勇み、進んで、謝罪せざるを得んや。余れ后悔して、而かも后ち長く恥かしと思ふは、人間の人間たる廉恥の念より、然るにあらで、其事の尚ほ廣ろく露れんとを恐るゝが故也。其事の尚ほ廣ろく露れんとを恐るゝは、人を躓かせじとの、高尚なる心情より出るにあらで、其事を隠くさんと思ふが故也。人の噂も七十五日を限り、時は常に事を隠す。余れ其事の隠るゝに連れ、人わが過去を忘却するに乘じて、わが恐ろしの工夫、見よ〳〵其事を消し去らんとす。此心既に生ず、これ過去と現在とに於て、余れは同一の余れなると、極言すれば、余れ過去に於ても罪過なしと、證明する也。されど事を隠すの時、必らずや又事を露はす。聖經に曰く「物として神の前に顯われざるはなし、我儕が係れる者の眼の前に、凡てのもの裸にて露る」と。誠や、昭々たる天道、儼々たる應報、如何でか邪智悪念の眩ますを得べけん。蓋し、人は罪なき者とせば可なり、人は進化せざる者とせば詮なし。されどアダム以來、皆これ罪の性質を有して、而かも歩一歩、段一段、遂にクリストの聖に迄で、進化すべき者とせば、何を以てかクヨ〳〵と、過去の罪を悲まん。悔て后ち長く、過去の罪に憂悶するは、これ其罪を過去に葬りしにあらで、今なほ洞然これを解脱せざるの證也。罪を過去に葬るとは忘却し去るの意にあらず、只現在の己れに附着繫累せざるの謂なり。故に其過去の事實は、現今の己れに存せずして、現在及び將來に於ける、己れの敎師また忠告者なりと覺悟すべし。勇と云ひ、剛と云ふ、余れ其實體を見たるとなし。

されど己れの過失、罪惡を認め、謹嚴に之を責罰して、そも再びせざる如きを、眞の剛勇とは思ふ也。箴言に「己れを治むる者は城を攻取る勇士に愈る」と云ふ、至言なり。余れ常に味ひて密かに泣き、叙むそに微笑す。ア、直ちに悔るは美なり、瞬間に覺悟するは美なり、されど人間の能力、神にあらざるを奈如せん。さては余れ早急瞬間も願はずして、眞に痛悔し、堅く覺悟するとを専念す。速かに悔ひて速かに之を繰返す、これより見苦しきはなし。一度び悔ひては決して之を再びせざる、勇烈とれより美なるは無し。嘗て敷島の大和心を以て、威張り散らせる日東の民、人若問はゞ何を以てか答ゆる。謹嚴莊重の氣、至誠眞率の風、今や此邦を掃ふて、朝日に匂ふ山櫻、看よ何人の心にか咲ける。悔よ、悔よ。若し夫れ堂々として悔るとをせずんば、嗚呼、噫、危い哉。

緊要の事件たるにより、婚姻論を后にまわし、本號社説に島山男子を論ず。次號に引續き自殺の評論を爲すべし。

小説

マイルスタンヂッシュの戀

第五回 (上)

五月花の出帆　　愛山生

牧地より霧の立上れる未明の灰色の中にプリマウスの眠れる村に一の嘈閙一の響きありし是れ武具の鏘然たる音低き調子なる進の號令、足踏の音なり而後に再び寂然たり。霧の中に十個の人影が邑の外に靜かに進り、是即ち勇悍なるスタンヂッシュと其八人の健き軍勢が白人の朋友なる印度人の案内者ホヾモクに導かれ野蠻人の遽かに叛きしをば平げんとて北方に進なりけり。彼等は霧の中の巨人の如くダビデ王のますら男の如く見し。彼等は神と聖書とを信ずる其心の巨人あるものなり、然りミデア人とフイリスチ人の攻撃の中にも信仰を有ちし巨人なり。彼等の上には遙に曉の眞紅の旗の輝き彼等の下には沙上に聲高く打よする浪は進り。其樣かの硝線に沿ひて發銃し更に規律正しき引退きをなす兵士の如くに。

彼等が數哩を進行せしとき終にプリマウスの邑は其眠りよりさめ起ちて其種々なる勞役を勵めり、空氣は芳しくて軟なり煙筒の煙は靜かに葺屋根の上に起り斷へず東方に向へり、人々は戶を出で來たり、立止りて天氣につきて話しせり、風がかはりて五月花には追手なりといへり、彼等の尉官の出立と威嚇されたる危難及び彼れ既に行きたれば其留守の間に村人の爲すべきとなどに就て話せり。樂げに鳥は歌へり。波は日の來るを喜べり山々の青き頂を照せる日の脚は美しきかな今碇泊せる「五月花の冬月の風雨に擊たれて黑められてさかれたる帆の上を照す日の脚は美しきかな、幾度か强風に破られ水牛の手に由りてわずかにつくろはれたる帆布はゆるく檣に懸りつゝひるがへれり。不意に舟の側より大陽の海上に昇るが如く一縷の煙立上りて海の方に靡きしが瞬時にして田圃と森林とを越へて高く大砲の音ぞ聞へける。反響は響をくりかへせり是ぞ出帆の號砲なりと嗚呼其人民の心の反響は更に鋭かりしあり、肅然たる低聲にて聖書の一章は讀まれたり肅然たる祈禱は始れり然れども終に最も烈しき祈願とはなれり、爾時プリマウスの移住民は男女老幼悉く其家を出で急ぎて海岸に下り來れり、泪ぐめる眼をもて將に海を越て家鄉を指し彼等の此荒地に殘し去らんとする「五月花」に別辭を述んと願つゝ。

彼等の中にていや先に進みしはアルデンなりき彼は殊に其心もゆる計るなりと身を輾轉しつゝ終夜まどろみもせず橫はれり彼は會議より遲く還りしマイルス、スタンヂッシユを見たりスタンヂッシユは室中を濶步して時々クドクドと訴る如く誓ふ如く獨語せしがやがて寢室に入りてシバシ默然として立居たりしが其所を離れ步みながらに曰へり余は彼を覺さゞるべし彼をば眠らしめん最早彼に語るべき要もなしと斯くて彼は明拂曉には出立するを得る樣に衣きたるまゝ燈火をけし寢室に身をなげ倒せりフランダア人と戰かひしとき着たる上衣を身にまとひ戰爭の用意して露營に眠兵士の如く眠れり。夜の明ると共に彼は起てり、アルデンは曉の薄光中に彼が鋼鐵の胸甲其外の武具を身に着け其信任せるダマスコ製の劍を腰に帶び銃を屋隅より取て部屋を步出を見たり此時アルデンの心中は屢彼を抱かんとする迄にもだへぬ、彼の唇は屢宥恕を乞ん爲に詰出んとし、昔の友誼は其やさしき溫雅なる情と

共にかへり來りしかどもうたてや高慢は彼の尊き省性を制しぬ!!高慢と其惡を爲したりと自覺する感情と其醜耻の烈火とは彼の心中に地歩を爭ひぬ。斯くして彼は其友が怒の中に出行きしを見たれども一言をも發せざりし恐らくは生命も危き計りに思はるゝ危難の場所に往かんとする其友を見ながら一語をも交へざりし！彼はやがて寢床を起出てゝ人々に物語れるをきゝしかば戸口に出てゝ言語を交へステブン、リチアード、ギルバルトなど云ふ人々と共に朝の祈禱と聖書の朗讀とに打交りさて人々と共に海岸のプリマウス巖といへるに下り行きしなり此巖は新世界の入口として彼等の足下に横はりしものにて國の陽の首石といふべきものなりける。

紫海の嵐

みさを

第六回

大村の國主大友義鎭は數日來不在なり、只夫人のみ奥御殿に在り黒柿作りの火鉢に凴りて長烟管をつき、思ひに沈みたる躰なり、何事の心にかゝるにや、はや正午に間近き頃、大友義親公の御入りなりと呼ぶ聲に夫人は靜々と立出で迎へ、直ちに奥御殿に招じて談話に時を移す、互ひに喜びて禮を爲すは久濶を謝するの辭なるべし、さすがは姉弟なり、相談ずるさま睦まじく見ゆ。

「一女きみ子花紀今や十四、はや嫁がしめん時ともなりぬ、されど先つ年より度々申し遣はしける如く聖教を捨てずんば婚儀を結ばしめ難し、何時の頃にや、親虎をば豐後に放謫して前非を悔ひしむるの處置に出でしと聞けり、今日は即ち如何、汝に遇ひ見て此事を問はばやと欲し、さては今日の登城を促せしなり、如何にぞや」と、夫人は懇ろに問いぬ、義親徐ろに答へけるは「某も深く此處に憂ふる所ありて樣々に考へし末遂に親虎を放謫せり、それより既に數月を過ぎぬ、こたびは必らず其心を悛めしならん、人の往來も全く絕え、音信だに通ぜぬ深山の奥にたゞ一人の臣下を侍せしむるのみ、如何に親虎の心剛なればとて斯程の困苦によく堪ゆべきかは、若心の變りなば速かに婚儀を許し給へ」と乞ひぬ、夫人は「さる事とあらば何時までも緣を結ばしむべし」と答へぬ。今日は亦何故か數十人の兵士臼杵城外に出で、行列を爲して立居たり、二台の輿に數人の騎士從ふて間もなく行列の間を

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

過ぐ、並み居たる武士皆頭を垂れて靜粛に敬意を表す、輿の後に從ふて皆亦城中に入る。

過る日義親は國守夫人の許に至り、語りし如く親虎の心もはやわが命に從ひて聖教の事思ひ絕つならんと察し、今日人を送りて其流竄せる地より親虎を迎へしめけり、速かに國主の一女を親虎に配せんと欲すればなり、快からぬ面色して舊時は待遇せしに今日は顏容いと和らぎ、親虎を見て言葉を靜かになし「よくこそ歸り來りつれ、久しぶりにて遇はまく欲せし事切なり」など云ふ、そが心の如何あるかも知らで喜び迎ふる淺ましさ、迎へらるゝ心の中、却りて後の憂苦を思ひ見て悲しかるらん、わが心に叶へば喜び愛し、然らずば惡み疎む人ごゝろたのみなきかな。

親虎は嘗て住みなれし御殿の一室に移りて許多の人々に侍かれ、其日は問はるゝ事もなくて暮れぬ、明くれば朝まだきに亦二人の使者入來りぬ、義親の命を奉じて親虎に問ふ事あればなるべし「若君には久しく山地に在はし、さぞ物淋しくや坐しつらん、こたび城主の君を召し還し給ひしは君の心變りて聖教を捨て給ひし事と思し召されしが故なり、我等臣下亦斯く思ふて主君の爲め喜びに堪へず」と云ひも終らず、親虎聲を高くし「汝等が來れるは斯る事を問ふ爲めの使者にや、某は聖教を捨て、上帝を離るゝの甚だ罪深きを知る、さればよし身死し、命落るの艱苦に遇ふとも信ずる所は變へじ、斯く父上に答へよ」と云ふ、使者亦云ふべきなくして不興氣に立去りぬ。

失望落膽極りなくものをも云はで顏を皺め、臂台引きよせ、顏を傾け、心配を爲す義親、其子の己が心に從はねばなり、國主夫人と約せし婚期もはや近づきぬるに親虎は舊に依て聖教を奉ずるの心厚し、心にかゝるは是なり。

世と絕ち、人と離れ、孤棲獨居するとも信ずる所だにあらば寂しきにも友あり、悲しみにも慰さめある心地やせん、されど人はもと相互に交はるを好むの性あり、况して聖教を奉ずるものは傳教師に教へられ、教友に語らるゝ言は恰も靈性の糧の如し、此故に親虎は一日竊かに城を脫れ出で、カブラル教師の許を訪ひぬ、教師は嘗て親虎を教へ導きし事もあれば己が子の如く思ひ、深く愛しぬ、親虎も亦父に遇ふたるが如く感じ、教師の膝下に伏し、涕泣する事久し、やゝあつて云

ひけるは「洗禮の式に預り、信徒の數に加はらまし」と乞ふにぞ敎師は其心をあぐさめ、洗禮の急ぐ可からざるを說き、如何なる事變に遇ふも確乎として信仰を保ち、他日神の許さん日に洗禮を施こすべしと敎へぬ。

敎師の敎へをきゝ打よろこびて親虎は宮に歸りぬ、時に父義親の召すにぞ至れば亦例の如く父母共に聖敎を捨てん事を切望する旨を告げ、親なる人の言に從はぬは不孝の子なりと詰りぬ、親虎は禮を正しくし、言葉を恭くし、父上の恩惠は深く謝すれども上帝を離れて此世の富を得んとはせず、聖敎を捨てよと云はるゝ事、是のみは從ひ難し、若父上にして之をのみ許し玉はゞ如何なる事も從はんと答へけり。

幾度苦しめ、幾度免し、亦幾度責むるも其功なければ義親はいとゞ困じ果て、此上は詮方なしとて使をカブラル敎師に送り、云はしめけるは人の子なるもの其親に孝順なるべきは天理人道なり、さるに我子親虎敎師の敎へを乞ひしより、實に不孝頑迷、我命に從はず、不孝の事こそ多かりけれ、かくても聖敎の信徒と云ふべきかと、カブラル敎師はいと心得ぬ事とは思ひしが打すて置くべきにあらねば直ちに一書を認め親に背くの不可なるを諭し、只聖敎を守りて以てよく親に事ゆべしと告げぬ、親虎此書を得て大ひに感泣し、義親に告げて其命に從ふべしと答へぬ、親虎の信仰變りけるにやと思ひ義親の喜こび極りなし、やがて亦望みを失はん、親虎は聖敎に背かざる限りは父に順ふと云ひしなれば。

今ははや詮すべなし、其心を迷はしむるにあるのみとて、義親之より親虎を城外に出遊せしめ、人をして或は劇場に誘はしめ、或は娛樂に沈らしめぬ、年若き人とて斯る誘惑に打勝つ事は甚た六つかしかるべきに、親虎は少しだも其心の動かぬのみか、愈々強くなりぬ、尙幾許の苦艱に遇はんとすらん、そばの見る目も心安からず。

批評

戰袍日記

蕪泉子

佐々友房氏の著なり。近頃古傑しば〳〵舊話を談す。自由新聞には、板垣翁の東北戰畧記あり、國會には林有造氏の舊夢談あり、共に遠慮なく當時の實情を記るす、蓋し國會開設後

の幸運なり。今ま、佐々君の戰袍日記を讀むに、丁丑の賊情歴々として覽るべく、未だ公けにせざりし戰略の之によりて知られたるもの少なしとせず。史家を益すると多かるべし。文章雄偉、間ま陣頭の口吟を載す、英氣煥發味ひ深し。特に薩將の人物風采を叙するところ、一段の趣きあることを覺ゆ。

○女學校用●新編小物理學　磐泉女史

初等の教課書を著すに當り、特に注意を要する點數個あり。文章を平易にして、誤解し易き個所なからしむること、記事の秩序を整ふること、成る可く常事に遠ざからぬやう爲すこと、講讀するに當り厭倦を生ぜぬやう注意すること等なり。

木村理學士の編述せられたる、新編小物理學は全篇二百十三頁の小冊子にして、唯行文の何となく澁滯する氣味あるやの遺憾なしとせざれども、先づ以上の要點を備へたる、良書と思はる。吾等の如く初等教育に從事する者は、毎に此類の良教課書に乏しきを憂ふること久し。今日幸に此小物理書の世に出たるを見るは、甚だ嬉ばしきことなり。

特に勉て本邦に於て生じたる、最新の事實を集め、折に投じて漏すことなく、深切の説明せられたるは、他書に於て見ざる所なり。例へば帝國議會に於て議決したる、新度量衡を用ひられしこと、客年十一月スペンサー氏が上野公園の博物館内に於て、乘り試みし、輕氣球の寫眞を卷首に掲げて説明せられしこと、深川八幡の祭日に永代橋中斷して、死傷者のありしなどの適例を掲げて、隱に後者を戒められしとの如し。其他插畫の數多くして精密なる、用紙の堅くして良質なる等、供に用意の至れる、一斑を見るに足る。

○史海　蕉泉子

鼎軒居士、開化小史の昔しに返り、一種得意の批評眼を以て今后「史海」を編著せんとす。第一卷には、竹内宿禰の評傳あり。惟ふに、逐次偉人を論じて、たとへば、ロードが「史光」に傚はんとするもの歟。果して然らば、先づ神武帝を傳し奉まつらざりしを遺憾とす。宿禰を目して大江廣元の亞流とし、其六代歴變の機に際して、周旋運轉の巧妙且つ忠實なりしとを推論する所ろ、凡ならざるの着眼とす。徂徠云く、竹内宿禰は三代の相續にして一人の名にあらずと。鼎軒結末に來り此危渦を輕々急過し、六朝の舊臣を一老偉人となして論じ去りぬ。殘

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

り惜しき言はん方なし。

○かた糸

雲峯生

愛は人の益をはかり、敢て利己を思はずとは千古の確言なり。世間實際に此事なしとするともセメては人の理想に存せん事を望む。蓋し理想は常に之を實行せんと欲する目標なればなり。人情の奥妙を寫し、相愛の機密を畫く小說家の如きは殊に此理想なくんば不可なり。若夫れ徒らに卑愛劣情を畫くを是つとめて實情を穿てりと云ふが如きは誠に人を毒し、世を害する事少しとなさず。文學世界の第四編かた糸と題するは漣山人の著にして亦一種の愛情を寫すものあり。余は愛は人の益をはかるてう眞理の少しく此書に著はれたるを喜ぶ。勿論宗敎的に然るにあらねど苟も此眞理の少しだに含蓄せらるるあらば其書必らず卑猥に陷ることあければなり。此故にかた糸は通常の小說に見如く醜汚の文字あるなし、是よりしていよく高潔なる愛を寫すにつとめられん事を山人に望む。

東京衛生試驗所にて、母の乳の成分を試驗したる處ろ、百分中の養分は、大抵一割乃至一割四分位なりしが、廿一歲比の母に尤とも多かりしさぞ。又乳糖さ云ふ甘き味は、百分中七分ほどの割合なりしよし。

時事

○近頃の新聞雜誌

たれか烏の雌雄を知らん、何んぞ其の黑點々の多きや。たれか鷺の賢愚を知らん、何んぞ其の白點々の多きや。たゞ后人は之によりて當世を揣摩臆測せんとす。

○今年の帝國議會

怯兵も再度の出陣には膽安んずと云へり、況んや帝國議會の議員に於てをや。本年の議會は定めし大珍事あらん。憲法論に於て、内閣責任論に於て、必定大議論あらん。もし之なしとせば、前途茫々、國歩の方向を何如にせん。

○順流及逆流

人を評するものは、彼が行ふ所に、包圍時勢の流行に順ふか逆らふかに着目するとを要す、流に順ふは木つ葉すら能くす、激流に溯るは巨龍も倘ほ難しとする也。夫れ、洋風天下を席捲するときに當り、洋學の過多なるとを痛論し、洋風の甚しきとを絕叫するは頗ぶる難かりき、好て之を爲したるものは尋常の識見にあらじ。之れに反し、國家主義暴りに流行し、

誰も彼も保守家の面を冠ぶりて評判を取るの時勢に於て、西洋の長所を明論して毫も忌むなきは、亦尋常人の敢て爲ざる所ろなり。輕々たる浮れもの、口に國家、帝室、日本など云へる名目に假り、肩をいからせて壯士の樣を裝ふ、抱腹の至りにあらずや。

○機一轉

湖頭の奇變以來、時勢の機一轉し、今や洋派またポツ／＼と現はれ出んとす。吾人今後の黨する所ろ亦自づから異ならざるを得ず。

○大文學

小說にも厭き果てたり、元祿文學にもあき果てたり、俳諧にもあき果てたり、源氏物語にもあき果てたり。今後果して何如ん。高潔天に達し、至誠情を穿つの眞文學出づる日までは、轉々流聞して暫らくも定まる所ろなけん。夫れ、文學は天下を制する最强力の一つなり、大志ある靑年、何んぞ眞とに奮發せざる。

○活宗敎

政治にも劣るとなく、文學にも讓らざるものは、宗敎の勢力なり。宗敎にして活きずんば、民心遂に何如ん。ナポレヲンは好く、此眞理を知りき、今の內閣諸公、何んぞ冷々として之に着眼するとの遲きや。

○國礎

ビスマーク翁、嚴然伊藤博文氏に告げて曰く、諾、君が言ふ所ろの萬事を諒す、然れども君一事を欠かば、總て効なけん、他なし、君よく君が國を文明の宗敎國となすとを得る乎活宗敎なき國に於て、民心を安固にし、憲法を聖にするの望み殆んど無しと。今の政治家中、伊藤伯が此の謹嚴なる忠告に感服せし如く感服するものありや。而して感服するのみならず更に能く之を實行するもの果してありや。

○社會問題

見よ、時事新報の警報、社會問題中の至難問題に向つてシルシを擧たり。時勢は實際斯くほどに社會問題の研究を促がし來りぬ。自由黨も其昔に反りて、之を考ふると云へり。大に好し。たゞ決して破壞的に走らざるとを要す。

○一謝

家政の欄は餘儀なく割愛略除しぬ。次號には埋合すべし。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女報

可愛子編

◉露國皇太子御遭難に付ての女報（其二）

●老母泣て露太子の平癒を喜ぶ　露國皇太子が御遭難の折、大津小唐崎町の吳服店永井長助の店に御腰を掛けさせ給ひしと聞きしが、長助の老母は六十歲、手づから殿下の血痕の染みなしたる布切を洗滌し奉り、朝な夕な神佛は願をかけ、殿下の御平癒を祈り奉り、其御平癒に近きを聞きて、淚を流して喜びたりとなん。

●下婢の淚　我天皇陛下が這度の御行幸に付ては、貴賤貧卑婦女童幼となく、皆畏れ多しと、騷驚らせけるが、京都の或る旅館に供奉の某氏が泊りし時、下婢は天皇陛下と云ひかけて聲塞り、潸然として淚を落せりといふ。

●憐むべし惜むべし　去る二十日午后六時頃京都府廳門前に年紀二十四五歲の女子、剃刀を以て咽喉を突き自殺し居れり、遺書三通一は日本政府に、一は母に、一は弟文治郎に宛てたるもの、書中記する所今回の露太子遭難に付き、兩國善隣の交誼を全くせんとするにあるが如し、其志感ずべしと雖も、其愚や憐むべし、惜むべし、此妙齡有爲の女子を殺せるを、女子の名は畠山勇子、千葉縣長狹郡前原野川町の人なり、又聞く所によれば、東京下谷邊にて同女の爲め碑を建んとて奔走するものもありとか。

●奇なる願出　京都上京區元第九組百万遍町永田正泉の娘さだ子は、去る十五日郵便にて府知事に奇なる願ひ出でをなせり、其心忠義を思ふにありと雖も、其考の間違ひたる、卑劣なるは實に憐むに堪へたり、府廳にては猶豫するとなく、宜しく懇々と說諭すべし。

●露國公使夫人　は令孃と共に、去る二十日午后五時二十五分新橋着車にて神戸より歸京したり。

●露國領事夫人　は太子御歸國の途に就かせられしを以て去る廿一日歸港せり。

●皇后陛下には　去る二十二日、天皇陛下御還幸御出迎として新橋に行幸あらせられたり。

●天皇陛下　の御還幸を奉迎しせしは、府下の女學校にては、明治女學校のみなりし。

●越後高田の基督教會　に於ては今回の御遭難に付き、祈禱を開きたり、大關和子氏の如きは、淚を揮て來會者に所思を告白したりとぞ。

●近江婦人慈善會神崎支會　は去る十八日會長久保藤子より電信を以て露太子に御慰問申上げたりと。

●高知縣尋常師範學校女子部生徒の修學旅行及び同地の海南學校の遠足等　は何れも露國皇太子御遭難に付き、差引へたりといふ。

●妻子何の罪かある　滋賀縣下にては、津田三藏の妻子を退去せんとする者あり、三重縣下にては歸り來るも之れを容れざらんとする者あり、三藏固に罪ありと雖ども妻子何の罪かある。

●日本の爲に論ず　今回の事變に付ては、未だ禮を知らざる外國婦人中には、日本は野蠻なりなど、評し、先頃も之が爲め日本婦人をして赤面せしめたる折から、米國人ジョードン氏（外務省御雇）手を以て衆を制し、さな宣ふな貴女方よ、歐洲諸國には臣民其君主を斬りたるものさへあるにあらずや、若し今回の事をもて日本を野蠻なりと言はゞ、歐洲諸國は皆野蠻人民に非らずやと云々と說きたれば、滿坐再び言葉を發するものなかりしと。

●露國皇太子御安着の報　同殿下は去る廿三日を以て、御恙なく浦潮斯德港へ御着在らせられ、全日午后二時二十五分發電報にて、身躰頗る壯健に付、御安慮在らせられ度、殊に日本滯在中、陛下并皇后陛下より蒙りたる懇篤なる御待遇、及び御厚意は余が好紀念として最も深く感銘する所なりとの旨を天皇陛下へ申進ぜられたれば、我兩陛下よりも御返電遊ばされたりといふ。

●外人我が兩陛下の御美德を欽ふ　今回露皇太子殿下御遭難の一事に付き、我が天皇皇后兩陛下の隣交を重んぜらるゝ御美德を稱たへ奉つり、陛下の萬歲を祝せぬものはなかりしとぞ。

●**皇后陛下の御誕辰**　去る二十八日には皇后陛下の御誕辰なるを以て、諸親王大臣を始め宮中奉仕の諸氏は何れも祝賀の爲め宮城へ參內せられたる由。

●又　皇后陛下の爲めに　婦人大祈禱會は同日本鄉中央會堂に開きたり。

●樺山大臣の夫人　は去る二日、夫に伴ふて大磯に赴かれたり。

●兩皇女の御參內　皇女常宮、周宮の兩內親王殿下は去る二十四日宮城へ御參內陛下に御對顏在らせられ、黃昏頃御歸殿遊ばされしと。

●兩皇女御移轉　皇女常宮周宮殿下には、來月十日を以て、芝伊皿子臺町の新御殿へ御轉移あらせらるゝ御豫定なりと。

●英國女皇の御誕辰　去る廿四日は、英國女皇ビクトリヤ陛下の御誕辰日なるも、日曜日に相當するを以て、翌廿五日に延期して、祝意を表し、同日は各國銀行、各外國新聞とも休業せり。

●皇后宮御代覽　美術展覽會は去る廿五日香川皇后宮大夫、高倉典侍外二名の女官代覽せられたりといふ。

●高崎男爵の夫人死す　宮中顧問官兼歌所長高崎正風男爵夫人貞子は、去る十三日死去せられたり。

●女教員免許狀の下附　去る十九日午前東京府廳に於て、授與せし女子の小學教員免許狀は裁縫科假教員松尾カ子子外十七名なりと。

●東京府高等女學校　の生徒は東京市養育院の新調衣服の裁縫を、無料にて引受ける事に相談一決せりと。

●京都府高等女學校　に於ては此頃學資標準を定め、父兄へ向て餘り多くの資金を送らぬやうに注意したりと、誠に美擧といふべし。

●盲啞院獨立の期を速かにす　京都盲啞院にては獨立基本金募集の爲め大に奔走し、去る一月以來漸やく千餘圓の金を得たるに過ぎざりしが、今回露太子の來遊に會し二千圓の贈與を得たるより、非常に市民の感動を惹起し、本年中には少くとも五千圓の資本を得べく、明年度に至れば今日の姿にて維持するには市の補助を要せざるを得べし、併しながら同院は將來尙ほ擴張すべきと少なからざるを以

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

て、一万圓の資本を増すの見込なれば全く獨立するに至るは尙ほ數年の後に在るべし、只露太子の贈與により獨立の期を速めたるは、同院の大に感謝する所にして、何歟謝意を表せんと云ひ居る由。

●滋賀縣下の女教師　は公立小學に於て、訓導二十八名、授業生五十二名にして、訓導の最高給十四圓、最下給六圓、授業生の最高額五圓、最下額二圓なり、此外高等女學校に七名、各種の私立學校に五名、これ縣下女教師の總數なり（明治廿三年十二月調）。

●滋賀縣高等女學校初度の卒業生　は大野𨗉、土井孝、梁田安、（以上他府縣）岡田元、武内芳、福島種、中澤美加、武内田鶴、木村今、西村外、（以上本縣）の十名にして、私立教育會副會頭遠藤宗義氏の祝辭、卒業生總代大野嬢の答辭ありて、卒業證書を授與なせしは客月二十八日の事なりし。

●滋賀縣下の幼稚園　は大津にあるもの唯一にして、現に八十八名の幼兒あり、三人の保姆之を撫育せり。

●醜業者の會議　江州各遊廓より委員二名乃至三名づゝを出し、去る廿一日より蒲生郡八幡遊廓取締所内に於て、近江全遊廓同盟組合定例會を開設し、營業上のことを討議せし由。

●神戸婦人傳道學校のバロ女教師　は去る九日丹波龜岡町に赴きたり、之を好機として、全夜婦人會は龜岡町に開かれたり、來會者四十餘名。

●大阪梅花女學校の運動會　去る二日、同校の運動會ありたり。

●本邦婦人の遠洋探撿　目下小笠原島に於て、最も勢力ある藤崎忠平氏の妻君は、此程遠洋探撿を思ひ立ち、四月中旬同島へ着したる卯の日丸（七十餘噸積）を雇ひ、自ら上乗りして父島を發し母島へ立寄り直に父島に歸ると告げ、事を漂流に託して小笠原島の東方なるグランパス島へ向けて航行し、今月十七日頃には未だ父島へは歸航せざるよしなるが、同嶋の人々は同婦人が四十才に超たる婦女の身にて、自ら資本を投じ自身遠洋に乘り出したるを見て、皆其大膽なるに呆きれて居るといへり。

●女學校の養蠶　は追々盛ならんとす、福嶋縣尋常師範學校女子部に於ても、其二年生は、餘暇を以て養蠶に從事し〇三重縣津市なる、私立三重女學校に於ても、女生徒養蠶をなし、寄宿生每夜代りて之に從事し〇又仙臺市東二番町高等小學校女子部卒業生の設立せる女子同窓會にても、本年は實地に養蠶の修業をなすことゝ決定し、元の松平知事夫人は自邸の一家屋を養蠶室に貸與し、又縣下の有志者は同會に種々寄附をなす者ありといふ。

●三重私立女學校　に於ては、去る二日第二回卒業證書授與式を擧行せり、卒業者七名。

●感ずべき二婦人　三重縣鈴鹿郡阯下村なる石田貞藏の妻ちえ子は、明治十年三月石田家に嫁したりしが、同家素より饒かならず、年々貧窶に赴き、明治十七年布哇國出稼者募集の擧あるや、夫は之を應じて同國に渡航したり、爾來ちえ子は夫の安寧を祈り、單身家事を擔當し、晝は深山に入り柴薪を採り、夜は草履縄等を製して之を市に鬻ぎ、又或時は重荷を脊負ひ夜中鈴鹿の嶮阪を踰へ、遠く江州土山驛に輸送し、僅かの賃錢を得て一家の糊口に充つるのみならず、老母には溫衣を與へ、二人の子をば小學校に通はしめ、且つ些少の餘裕ある每に舊債を償却し、千辛万苦其家を整へ、志操を變ぜざること茲に十數年、奇特なりとて、本年四月二十四日縣知事より賞金五圓を下賜せられたり。又同縣下飯高郡栃野村西村源七母小さよは、よく家業に厲精し曾て故姑が中風病に罹り身躰自由ならざりし折、孳に侍養して看護怠らざりしと十數年、其間一日の如く、且夫に事へて克く婦道を守る事奇特なりとて、本年四月二十八日縣知事よりして賞金二圓下賜せらる。

●佛教婦人會　三重縣多氣郡相可村の同會は、四月二十六日其發會式を擧行せり。

●丸山忠子氏　山形縣羽前國東村山郡天童町、高等尋常小學校裁縫教授、丸山忠子氏は、曾て宮城縣仙臺裁縫學校を卒業したるが、漢學にも達し、教育に熱心なりとの評あり、全校就職以來、教授上に改良を加へ、又此頃は赤貧にして學校に通ふと能はざる、同地の女子の爲め、自宅に於て裁縫並に普通の學を、無月謝にして教授し居る由、感心の事と申すべし。

●山形縣東村山郡の天童婦人矯風會　は丸山忠子氏其外の有志者が立つる所なり、會員數十名、會長には丸山氏、幹事には全地小學校長高梨惣助氏の妻君はち子氏なりと。

●宮城縣仙臺に於ける結婚數　は本年一月より三月までにて、百九十三件にして離婚數は六十二件なり。

●仙臺市大町なる形管學校（裁縫專門）にては此度高等卒業生二名、尋常卒業生十八名を出せり。

●宮城婦人會　は今度都合によりて解散せし由なるが、同會の紀念を表せん爲め、貧民救助費として十一圓餘を市役に納めたり。

●宮城病院内産婆講習所　にては此度十五名の卒業生を出せり、又同所にては新に十九名の入學を許せり。

●宮城縣下刈田郡白石町に於ては中等以上の婦人の風儀を益改良せんとて、同地小學校卒業生某女は目下奔走中なり。

●慈善音樂會　去る二十三日夜、宮城縣仙臺の基督教青年の催しにて貧民救助の慈善音樂會を開きたり、參集三十一人許、さしも廣き仙臺坐も立錐の場なかりし。

●宮城女學校にての安息日學校　は去る二十三日の夜、面白き集りを開きたり。

●盛岡婦人矯風會演說　岩手縣盛岡なる婦人矯風會にては、去る二十三日演說會を開き、小谷野敬三、村木經策二氏の演說ありたり、閉會後同會員及び盛岡慈善會員の手に成れる編物を陳列し、會衆の縱覽に供し、求めに應じて賣捌きたりと。

●越後高田の廢娼論　同地に於ける廢娼熱心家は、此頃滯在中なる新嶋公義、鳥居㭺、木下尙江の三氏を聘し、去る十一日午後七時半より、基督教會堂内に廢娼演說會を開きたり、鳥居氏は生憎病氣の爲め出席せざりしが、聽衆二百餘名あり、新嶋、木下二氏は熱心に演說したり。

●越後高田の教育展覽會　は去る十六日より十八日まで、同地吳服小學校内に開きたり、女生徒の出品は、押繪、編物、レース、衣服、英作文、書等なりしといふ。

●私立岡山看護婦産婆養成所　にては去月二十九日、産婆卒業生藤野さく、外三十三名、看護婦卒業生藤野さく、外二十九名の第一回卒業式を擧行したり、今回

●禁酒演說　本月三十日午後二時麴町區番町教會に於て根本正小方仙之助二氏の禁酒演說あり

の卒業生は、卒業證書と同時に內務省免許證を受領したり、看護婦養成所は中川横太郎氏等の計畫によりて、昨年二月三日を以て創立し、其砌八十六人の入學生徒を得たるも、中途退學する者ありて、三十四人產婆となり、三十人看護婦となり、內九名の落第者ありしと云ふ。

●高知の貧民學校　は去十一日より高知市本町青年開館に開校せり、目下生徒二十名許。

●札幌婦人慈善會の義擧　過日北海道札幌近傍の原野二百町計り、人戶十數戶燒失の際、同地の婦人慈善會より五十圓の義捐金をなしたり。

●北海道の移住民　本年は諸縣より北海道に向て移住するものあれども、多くは流產の民に異ならず、或は親子相提携して、路傍に倚れ乞ふものもありと、植民政策の大に講ぜざるべからざる知るべき也。

●將軍ブース氏の大計畫　去る一月廿一日に於てブース氏が其大計畫を果さん爲め十万磅を要すと公言せしより以來「最暗黑の英國」と呼ぶ貧民の集合する所に於て實際に其計畫を施行し貧民の救助をなし男子の囚徒の爲めに家を作れり、尚此外に女子囚徒の爲めに一家屋を設くるよし、其他チールド街、クエーカー街、ハンベリー街等に製造所を設け多く貧民に職業を與ふ、職工の勞働時間は八時間と定め、よく勤めば婦人少女の如きものも其得る所の賃金もて生活するに餘りありといふ、女子及び若き人々を働かしむるは多くマッチの製造所なり、ブース氏公告して云はく此の製造所にて製せしマッチは其箱に於て此の肖像を印し、以て商標となす云々と、當時はスヰーデンの職工の製造せしものを用ゆれども久しからずして英國の職工の手になりしものにて足るに至るべし、英人一般に之を望むといふ。

●婦人の世界一週　亞米利加の婦人にてミス、ワレーと云ふは、本年十九歲にて紐育府の世界と稱する新聞の通信者なるが、七十七日間世界一週を思ひ立ち此程一人にて紐育を出發したりとの事なり。

●ラマバイ會　印度の教育家ラマバイ女史の爲めに設けたる會合あり、牧師ヘール氏之が會長たり、過る三月の會合に於て收入九千七百二十二弗、內支出八千四百二十八弗なりき、他の人々より年賦にて拂ひ込みし金高二万八千五百九十弗なり、過る三年間寄附金總高四万六千弗にして內支出一万七千四百十三弗なりし、會合の日にはラマバイ女史の手簡も公讀せられ、亦女史が教へたる生徒より感謝の意を表せし手簡も多かりき。

●スミス夫人　仝夫人は合衆國に歸りし以來ブルックリン、ボストン、フヰラデルフヰア、ニウチルレマンスの諸方に於て傳道に專心し、未だ寸暇もあらずと某新聞は報ず、夫人の勤勉なる人の請ひある時に之を謝絶するは怠惰なりと思ひ、至る所に働かるゝよし、殊勝の婦人といふ可し。

●ジョセフヰン、シモン孃　は此度ロンドン郊外の某地方より撰擧せられて代議士となるベーレー氏に嫁するよし、孃が米國を發せんとするや、聖ヒームス館に於て知友等送別の宴を開けり、時に孃が答へにうたひし歌は前途の希望をあらはすものとならんベーレー氏は尚若年にして甚だ將來多望の人なりといふ。

●日本全國卒業女學生一覽（學校創立より本年四月に至る、）（第四）

●東京の部（四）

●華族女學校　井上郁子　萬里小路久子　黒川千春子　三嶋園子　託摩登茂子　長興保子　高嶋延子　隈川千世子　藤里子　阿部悟子　吉野勝子（合十一名）

●頌榮女學校　日原さと子　高林さし子　徳澤くす子　田中みな子　前小柿まろ子　高橋のぶ子（合六名）

●普連土女學校　兼友直子（英學部卒業）（一名）

●成立學舍女子部　竹山靜子　石原留子　小出悌子　小野竹子　小野鎮子　津久井春子　嘉悦孝子　禿貞子　中村常子　大井幸子　早川文子　小原直子　竹井弓子　永安榮子　山中絲子　長沼金子　正田高子　山崎しげ子　中村しげ子　石原すぐ子　辻さよ子　田中喜千代子　山口清子　大嶋きん子　川嶋はま子　高山こと子　本條高子　中澤暢子　芳賀しづ子　小坂さや子　清水いね子　稻川さし子　横山柳子　田中ため子　太田清江　毛利すま子　高橋やす子　三田さめ子　稻葉みさ子　赤星ちよ子（以上本科卒業）（合四十名）

築山元子　澤田京子　指原乙子　龜井まき子　大塚美香子　中原蝶子　関たま子　山寺正子　四屋琴子　横井初子　横田つや子　嶋田しげ子　依田珠君　齊地千枝子　吉村津子　岩村郁子　竹内千世榮　廣瀬のぶ子　四屋直子　杉岡菊子　雅光子　岸田せん子　瀧澤興子　久留常子　寺西可祝　葛淳子　佐々木直子　松波すみ子　寺西菊枝　和田梅香　内田靜子　林りん子　福井民野（以上撰科卒業）（合三十三名）

嘉悦孝子　石原留子　小出悌子（以上高等科全科卒業）（合三名）

林たか子　龜井まき子　竹山靜子（以上高等科英學撰科卒業）（合三名）

◎正誤　女學雜誌第二百六十五號卒業生一覽中、明治女學校の英學撰科卒業生福田よう子は、稲田よう子の誤、速記科卒業生鈴木けん子は、鈴木げん子の誤。

週報

●政治　十九日日本人解停●廿三日國民新聞、中正日報解停●民報は廢刊す●廿四日信州松本に小暴動あり兇徒一万人嘯集せしが間もなく鎮定せり●同日內閣會議●同日自由黨協議會、部長定まる●同日能辯學會演說中止會散●廿五日津田三藏被告事件裁判を大津裁判所に開く。

●要報　廿三日露國皇太子無御恙浦鹽斯德港に着●二十四日土耳其皇帝より我天皇陛下に贈進せられし名馬を天覽遊ばさる。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

品名	五月廿八日
白米（一円に付）一等米	一斗〇升〇合
二等米	一〇二
三等米	一〇九
四等米	一一三
五等米	一一八
正米（一円に付）越中米	一斗五升三合
越後米	一四八
美濃米	一四五
尾張米	一四六
一志米	一四〇
雜穀（一円に付）本大麥	二斗三升五合
上州小麥	一五五
竹林麥	一三五
梅澤大豆	二一〇
青柳大豆	二〇〇
吟小豆	一四八
白胡麻	一二四
黒胡麻	一四五
鹽（一円に付）赤穗	三貫六〇〇
大撫	三七〇
本齋	五六〇
新齋	六〇〇
醤油（一円に付）最上・極上・上上・中物・並物	樽 七分七厘　八四　八八　一一二　一三〇　一六〇　一八〇　二一〇　二二〇　二六〇
味噌（一円に付）地製上白	六貫八〇〇
同上赤	六、八〇〇
同紅赤	四、八〇〇

品名	五月廿八日
夏織物（一反に付）薩摩上布	七円八〇　二〇、七〇
越後上布	四、七〇　六、〇〇
同紺絣	二、五〇　三、五〇
同縞	二、七〇　四、五〇
透屋絣	二、七〇　三、五〇
明石縮	四、七〇　五、八〇
奈良絣	一、二〇　二、〇〇
能登縮	一、三〇　二、二〇
近江生平	七〇　一、三〇
越後縮	二、一〇　二、七〇
薩摩紺絣	一、三〇　四、五〇
同白絣	一、〇〇　一、七〇
鳴海紺絣	七五　一、七〇
白絽羽織地	三、八〇　六、八〇
京御召縮緬	六、〇〇　八、〇〇
桐生御召縮緬	五、三〇　八、五〇
銘撰縞	二、三〇　三、二〇
結城紬紺絣	五、八〇　八、七〇
同縞	四、五〇　五、五〇
壁一樂織	七、七〇　八、二〇
白木綿（一円に付）玉鶴	三反六〇
綾鶴	三九〇
日ノ出鶴	四〇八
若柳	三一八
一等蓬萊	三九八
蚊帳（一帳に付）五六　四尺	二円一三
六七　五尺	二、六四
六八　同	二、九六
六九　五尺二寸	三、三〇
七八　五尺五寸	三、四八
七九　同	三、七五
七十　同	四、一八
八十　同	四、六一

品名	五月廿八日
製茶（一貫目に付）新山城稀頭	二円七五
同大頭	二、三五
新駿遠稀頭	二、〇五
同大頭	一、六〇
同中頭	一、二五
同中茶	一、〇〇
新狹山稀頭	二、一〇
同大頭	一、七〇
同中頭	一、三〇
同中茶	一、一〇
乾海苔（十貫目に付）洲崎極上	一円〇〇
大森同	一、〇〇
深川砂村同	一、〇〇
大師潮田同	八〇
上總上々	七〇
青海苔上	一三
鰹節（十貫目に付）薩摩大	一七円〇〇
伊豆上	二〇、〇〇
城ノ腰上	一九、〇〇
房總上	一五、五〇
土佐大	一一、〇〇
水油（一樽に付）地水	七円〇〇
胡麻油	九、五〇
荏油	一〇、〇〇
桐油	六、八〇
綿油	六、四〇
坂水	八、〇〇
石油（一箱に付）チヤスター	一円六五
デボース	一、六四
カーキ	一、六八
ロシヤ	一、六一

家庭廉價 **女學書類發行** 女學雜誌社編輯

子供の談

紙數八十葉 郵税なし 定價十二錢

右は子供の爲になる好きお話にて、母親が言ひ聞かすに結構なる材料なり。第一、田舎音樂師。第二、蘭の君。第三、熊と旅人。第四、風と日の喧嘩。第五、ハイ〳〵とダヾイマ。第六、カンとクッド。第七、王にも勝てる人々。第八、母の愛。第九、柔順なる娘。第十、英雄の所業。第十一、まましき兄妹。第十二、正直な樵夫。第十三、慾婆。第十四、忠義の家來二人。第十五、不思議の新衣裳。第十六、小娘とガマ。第十七、尤も悪き所行。第十八、正直なる小娘。

西洋女禮

紙數六十七葉 郵税なし 定價十二錢

右は、婦人紹介の事。婦人書面紹介の事。婦人訪問名刺の事。婦人會話の事。婦人案内の事。散歩、かざり、宴會の事。食卓上の心得の事。婚姻の事。客を過する事などに分ち、西洋貴婦人の心得を一と通り平易に解明したり。

女子生理

紙數百九十葉 郵税なし 定價廿五錢

右は、月經の事。懷姙の事。分娩の事。の三つに分ちて、くはしく女の生理の事を說き。且つ長谷川泰氏が婦人病の元因、村岡範爲馳氏が眼鏡の話と云へる二つの論を附錄としたるもの也。

和書案内

紙數百廿葉 郵税なし 定價五錢

右は八木兼辰氏の講述にかゝるものなり。

兒育て草

紙數百六十葉 郵税なし 定價二十錢

右は育兒の心得を問答躰にして、人の氣のつかぬ細かなる事迄で一々說明し、母として子を育つる總ての心得を悉く講述したり。

邦文學

紙數百六十葉 郵税なし 定價二十錢

右は同志社敎師松山高吉君が講述にして、和文躰の文法、語格を、極めて細密に說明したるもの也。

女學雜誌は最も進歩せる、最も優高なる、最も眞面目なる、最も快樂ある雜誌也、女子は勿論男子と雖も一讀するの價値あり。

女學雜誌最近發兌目錄

第二百六十三號目次

社説　日本の宗教(教制、新佛教、理想教會、日本教育)
雜録　韻文想夫行(霞峯子)○女學生の理想(何事か尤さも樂しく面白く且つ望ましきやの問に對する十三女學生の答)○現世の陰府シベリアの眞狀○近三年間米國婦人の進歩
小説　マイルス、スタンヂッシュの戀(愛山逸民)○紫海の嵐(みさを)
批評　猿面冠者(美妙齋著)○十津川(學海居士著)○海外女學
文學　和歌數首(東京案山子の屋社中)○文學上の德義
笑草　さまぐ〳〵○婚后變遷の奇歯
隨感　直諫は一番鎗よりも難し(不希雄)
時事　西鄕將來○自由新聞○モルトケ將軍○廢娼論者○宗教界○貧窩論○女子に綸繡○女壯士○貧民婦女學校○國民兵學校○女文會○宮中女官論○不氣景一轉
問答
女報
通信　全國女學校卒業生姓名
週報
物價

第二百六十五號目次

社説　海外出稼の婦女醜聞。
雜録　生物に信切なれ(みどり)●敵兵同もに祈禱す(しのぶ)●想夫行(其三)●ウエスレーの母君(上)(霞峰子)。
小説　マイルス、スタンヂッシュの戀(愛山逸民)●紫海の嵐(みさを)。
具氏の宗教
隨感　現今女生の悲況(多涙生)
家政　初夏の家政●ヘヤ、ピン(髮針)の用途さまぐ〳〵。
兒籃　雀に化た小娘の話。
批評　日本評論の韻文(霞峰生)●讃美歌手びき(同)。
時事　凶變暴行●皇后陛下の仁愛●廢娼運動。
問答　河の事に付ての答其他數件。
通信
女報
週報
日本全國卒業女學生姓名一覧表
物價

第二百六十四號目次

社説　天狗世界
雜録　二宮尊德先生(報德講開祖)○想夫行(韻文)(其二)(霞峯子)○西士亞の景況○晩近三年間米國婦人の進歩
批評　濠洲及印度○西鄕南洲○三日月○日本教育論
文學　和歌數首(東京案山子の舍社中)○金言五則
家政　總理大臣兼内務大臣(家政を樂しむべき事)○家政簿記○百五十圓家具調達覺
隨感　婚姻箴(方寸子)○小兒の論理(川合信水)
時事　新總理大臣○條約改正○アンチ、フホーレン○伊藤伯大隈伯○時事通信○札幌製糖會社○英國商人○獸類逆待論○社會問題○婦女勞働者○盲人○外賓に對するの禮○台閣搖々乎○去就離合
女報
通信
週報
物價
日本全國卒業女學生姓名一覧表

第二百六十六號目次

社説　國家主義及個人主義
官行　寬容○受降○災害
兒籃　小公子(若松しづ子)
雜録　女學生の理想○戀愛辷理○想夫行(霞峰子)完結○具氏の宗教○
開書　金森通倫君に與ふ(山路彌吉)
小説　マイルス、スタンヂッシュの戀(愛山逸民)○紫海の嵐(みさを)。
家政　朝日屋の經濟
批評　家庭讀本
時事　陛下還御奉迎○正義眞勇○新聞紙○商業會議所
問答
通信
女報　露國皇太子御遭難に付ての女報尤も精し
週報

○色を白くするさぼんの元祖たる三能さぼんは

藥劑士大鐘立岱氏と製造人西條重兵衛氏と多年の實驗により主として男女全體の色を白くしにきびそばかす皮膚病及び諸傳染病の消毒に大効ある藥劑を配伍し調製したる物なり昨明治二十三年十月を以て弊店の發賣する所となり爾來日尚淺きも其効能の著しき事實に三能の名に背かざると愛顧諸彥の高庇により世に高評を蒙り弊店の幸福之れに過ぎず然るに三能さぼんの日に月に益々盛大なるを慕ひ數多の破廉恥商等種々まぎらはしき色を白くする○○さぼん或は何さぼん又は何と一雨毎に現出し何れも外見よく何分かの香氣を含み一寸素人好きのするさぼんなり然るに實際功顯わるる三能さぼんは返て容形わしく御使用中何となくざらつく氣みあれども是れ即ち藥力の致す處にして功能を主としたる諸據なり三能さぼんは決して香氣や形容を主としたる○○さぼんの類にあらず又尋常化粧石鹼と異なるものなり今回從前の商標即ち茲に掲げたる洋裝婦人の圖を以て公然商標とし農商務省登錄御許可相成候に付御愛顧の諸君篤と右商標御覽の上他の形容さぼんに惑はされず愈御愛顧あらん事を江湖諸君に希ふ●定價一個十錢郵税二錢郵券代用不苦候但二錢切手に限る右品各府縣下賣藥店又は和洋小間物店に取次販賣所御座候間御最寄にて御講求奉希候也

銀座一丁目
發賣本舖 つやぶきん本店 佐々木玄兵衛

女學生

第十三號

女學雜誌社發行

每月一回發兌●一冊郵税共六錢

女學生
至誠は白刄の如し……星野愼

まとひの莚
書室隨感……暗光子
哀れさよ……假名子
思ひのまゝ……可愛子
赤兒歌……雲峰子
迷夢……春風子

睦びの家
勇婦……(女子學院)美津子
堀川邸の靜女……(頌榮女學校)高橋のぶ子
都に上る路すがらの感……(明治女學校)鈴木げん子
困苦の橋端(下)……(女子學院)秋野すゝき
信を保て……(立教女學校)辻甫子
少女の心得……(東洋英和女學校)麻布よし子
Our Service to Our Country……(明治女學校)千住千代子
烈女……(越後高田女學校)赤井登巨子
五智に遊ぶ……(同上)京田節子
布施琴路

寄せぶみ
教育報知の寄書家馬淵生に告ぐ……川合信水
文話……星野忠直
赤染右衛門の傳……豐田作
亡母、東都懷古、人世……みゆき生
墓鄉(四)……望鄉生

昔ばなし
檀浦後の安德帝……如是子

通信女學第二期生新募集廣告

學問隆盛の今日、女學の進步一と方ならず、凡そ年頃の娘君にして稽發學に就かぬは最と〳〵少なく、既に一家の妻となりし方にても晩學の勉强をさ〳〵年少の人に劣らぬも多し、概して何處の婦女子も皆な學問と云ふことに心掛け凡そ此心掛なきものは當今の女德に欠けしやう思ふに至りぬると明治の代の恩澤にて有がたきことゝ云ふべし、因りて何處にも女學校の設けあり何處の娘君も玆に入學して日々の進步目覺しきとなるが、既に妻となり母となりて一家子女の掛念ある方々は最早家を出で通學するとも出來ず又家に敎師を引て敎を受けるも甚だ手數なれば今日の時世に斯る御婦人のみ此儘無學にか終ふべきかと心配する人も少なからず、此類の御婦人は何か家に在りて獨り稽古する工夫なきか、獨學に便利の書物はなきかと屢ば問合せあり、吾社之を以て遂に意を決し、昨年一月通信女學の仕組を新設し、毎月一冊の講義錄を出版して、四方晩學の婦人居ながら普通の女學を獨り學びするの便に供へたるが、本年一月に至り、一ヶ年の課業を恙がなく卒へて、快ちよく全科を卒業したるもの七百餘名あり。然るに、去年一月申込の期に後れたる人々も少なからざるを以て、本年更に講義錄を再版し、改めて第二回の習讀者を募る。

敎授科目左の如し。

萬國史、日本歷史、算術、簿記、理化學、生理學、動植物學、作文法文例、料理、歌詠方、女禮、和文讀本、漢文讀本、家政學、衛生、育兒、看病を合す裁縫、圖入地理、英學。

敎師は、醫學士三島通良、農學士寺尾熊三、磯貝由太郎、木村祐吉、其他重もに明治女學校の敎員諸君に委賴し、專ら親切鄭寧を主意とす。

代價一冊前金三十二錢（無郵稅）、半年分前金一圓八十錢、一年分前金三圓五十錢、一切前金に非ればば發送せず。

明治二十四年一月廿五日第一號を發兌し、以後毎月廿五日に出版して翌一ヶ月中の科目となし、其十二月に至りて全科卒業となす。

東京麹町區下六番町六番地　**女學雜誌社**

第三版

百人一首講義

上製美本　五十錢　郵稅四錢
並製淡裝　三十五錢　同四錢

青夏の讀書に宜し　遺物に宜し
歌留多遊びに宜し　詩歌に宜し

女學雜誌社

雜俗諸躰

作文口授　全

一名國文敎科書　鈴木弘恭口述

此書ハ大人カ各學校ニ於テ實地ニ授業シタル者ヲ筆記シタルナレバ國文ノ作例ハ勿論許多ノ熟語ヲモ擧ラレタリ此書ヲ一日セバ如何ナル初學ト雖モ消息記事論說諸躰ノ雅文ヲ立所ニナシ得ラルベシ諸君速ニ購ヲ試ミ給ヘ

出版所　神田美土代町四丁目五番地　敎文堂
賣捌所　麹町下六番町六番地　女學雜誌社

求婚

士族卅二歲某會社員月入金五十圓之人廿二歲以下ニテ初緣普通敎育ヲ受シ孃ヲ娶度人有之望之方ハ御來談アレ

日本橋檜物町　結婚媒妁所

廣告

一行	一回	前金拾錢（廿七字詰）
同	三回以上	一割引
同	六回以上	二割引

定價

一冊。	六錢	郵稅。五厘	（但府內無郵稅）
十一冊。	五拾八錢	郵稅。五厘	（同前）
半年分	壹圓四拾六錢	府外は	壹圓五拾六錢
一年分	貳圓八拾六錢	府外は	貳圓八拾六錢

發行所　東京市麹町區下六番町六番地　女學雜誌社
編輯兼發行人　巖本善治
印刷人　堀口庄三